

橋本哲哉・西田美昭両先生を囲んでの座談会

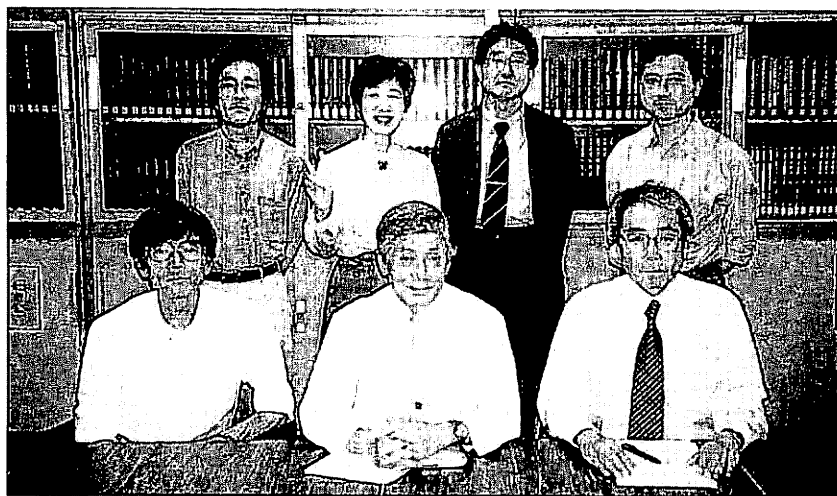
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 哲哉, 西田, 美昭, 山辺, 知紀, 内山, 雅生, 野村, 真理, 中島, 健二, 弁納, 才一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17661

橋本哲哉・西田美昭両先生を囲んでの座談会

参加者：橋本哲哉，西田美昭，山辺知紀，内山雅生，野村真理，中島健二，
弁納才一

日 時：2005年10月5日 16：30～18：00

場 所：金沢大学経済学都会議室



野村 山辺先生と内山さん，今日は来てくださってどうもありがとうございます。それではこれから来年3月で退職される橋本先生と西田先生のお二人を囲んで座談会を開きたいと思います。前半はお二人に学問論を語っていただき後半は特に橋本先生は長い間金沢大学の大学行政に関してこられたので，そのことについてお話をしていただきたいと思います。



橋本 今年1月に，西田さんといっしょにやっている院生のゼミで，自分の研究者としての生い立ちみたいなものを

話す機会があり、西田さんももちろん一緒に話をしているのですが、そのときに作ったレジュメに少し手を入れて持ってきました。時間がないのでこれを見ていただいて、お話しします。

最初は簡単な履歴で、そこにあるとおり、これは公式の人事記録から取り込んだものです。特徴というのは私の学生時代は全部東京教育大学、就職した後は金沢大学だけと非常に分かりやすい履歴になっております。大学院生に向かって話をしたので、どういうふうにして自分が研究者として自立したのかということ、次に少し話をしました。

私は学部、大学院とも東京教育大学文学部で史学科の日本近代史の講座と文学部経済学科経済史講座と両方顔を出して研究者としての基礎教育を受けたわけです。先生は大江志乃夫先生、楫西光速先生など多くの先生方にお世話になりました。特に調査の仕方など、基礎的なところから叩き込まれたと言っていると思います。

もう一つ研究者として自立する過程として私は、これは西田さんも同じですけれども、東京で大学院時代をすごしながら学会の事務局をやり、そこで学会の活動の何たるかの教育を受け、しかも学会誌の編集に携わり、場合によっては院生が先生の論文を審査するなどということもやるわけで、そういった学会での活動を通じて研究者としてここでも鍛えられました。

研究論文はそこに書いてあるようなものを主要業績として、一応書きました。そして今日は中身のつこんだ話にはならないと思いますけれども、産業革命期、あるいは時期的には日露戦争前後のことを、この段階ではかなりオーソドックスなやり方で、研究しました。ただ私の場合は、西田さんもほぼ同じ、後で話が出てくると思いますけれども、研究室や、大学で勉強しているというだけではなくて、社会的な問題、あるいは大学をめぐる問題にいやおうなく関わって行って、60年安保だとか、東京教育大学の筑波移転問題、それからこの教育大の家永三郎先生が行った教科書訴訟、これらに関わって、いずれもそういう意味では、社会的な経験が自分の研究者として成長するのに、非常に大きな意味があったと思っています。

そして1971年、履歴にもあるように金沢大学に就職しました。この段階までに、日本経済史の勉強をしてきたということが一定評価を受けて、金沢大学法文学部経済学科講師として来ることになったのだと思います。金沢大学に来て以後は、1970年代前半はまったく研究オンリーの生活で、幸せな時期というふうに書きましたが、東京時代とは打って変わった日常生活でした。非常に良かった時期だなというふうに今でも懐かしい思い出があります。

ただ私の性格上研究だけではなく、組合活動もやりましたし、それから石

川県社会運動史刊行会という、これは大学の教師と戦前の社会運動関係者とで一体となって作った、こういう会で活動したりしました。結局ずいぶんいろいろな紆余曲折がありましたけれども、1989年に私が編集代表みたいな立場でまとめた、『石川県社会運動史』という本が残りました。それとかなりオーバーラップする形で、当時の左翼の骨のある人たちがやっていた金沢の労働学校というものにも関係しました。

そして研究的に大きな刺激となったのは、業績目録に書いてある岩波講座日本歴史、古い方のほうですけれども、そこに「都市化と民衆運動」というテーマで書きました。これの普通は続編というところのほうにあるのですけれども、前の時期にあたるような、これは東大出版会がその後刊行した講座日本歴史の中で、「民衆運動と初期社会主義」という論文を書いて、大きくいうと日露戦争前後の経済史から、大正デモクラシー時代の研究というふうに、少しシフトをしました。合わせてこの地域の地域研究、地域史研究というものも1990年代はやったということになります。戦後60年の日本史学というような問題から言えば、この2つの講座は非常に大きい意味を持ったと思います。

幸せな時期から一転して1970年代の後半以降はもう連続して、しかも次第に多忙となり、ちょっとかっこよく言えば大学の自治に関わるような問題が、

金沢大学においてずっと展開していった、結局それぞれに皆関わっていったわけです。これは後半で話題になると思いますが、法文学部改組、経済学部設置、これは80年前後ですね。そのなかで経済史大講座の括弧付き自立性の獲得と、今日は内山さんが来るということで、林、内山両君の招へいという、これは結果的には経済学部にとってかなり大きかったというふうに、理解しています。

それから引き続いて角間キャンパスへの移転問題、これは組合活動ともオーバーラップしてやりました。それで終わりかと思ったら今度は大学院を作るというので修士課程の設置もありましたし、さらに博士課程も作るということにもなりました。博士課程のときは履歴にあるように、経済学部長1年目で一瞬設置の危機に見舞われ個人的には大変苦労しました。それをきっかけに喘息を患うというようなことにもなったわけです。

引き続いて教養部改組、さらに金沢大学50周年記念事業は、これはまあいいことはないですけれども、その後の法人化ということまで顧みると1970年代後半以降はほとんど研究というよりは、大学の管理運営にエネルギーをつかってきたのではないかなと思います、また自分が勉強不足だったという言い訳をそこでしているわけです。

ただ林有一君を経済学部を迎えたというのは非常にラッキーでした。実は

私は法文学部を改組する際に、彼をこっちへつれてきて一緒にやるというふう
に心に決めていました。はっきり言っ
てそういう意味では、林君の能力を西
田さんは東京で見抜いていたと思いま
すけれども、私は金沢にいて彼の能力
を見抜いていたのだと、ここはちょっ
とやや自慢しておきます。

研究を主体的にできなかった過程を
彼がカバーしてくれ、特に共同研究の
面で私に刺激を与えてくれて、この地
域の若手の研究者を組織化した。地域
史研究会というのをふたりで作って、
私がどんなに忙しくてもこの会にはサ
ボらずに出続けて、研究者として生き
ながらえたといえます。

林君が亡くなった後、地元の若手研
究者たちが成長して、ずっと彼の遺志
を引き継いでくれてきていますし、亡
くなった結果として幸運にも西田さん
と再会できて、これは後にもちょっと
述べますけれども、自分の仕事を見直
すのに、非常に大きな力を与えてくだ
さったなと思っています。

もう一つ私自身の研究からいうと、
一定の国際化をして、きっかけはウラ
ジオストク極東国立総合大学の研究者
と交流したということですが、その資
料収集を向こうの人たちとも一緒にや
りましたし、手を広げて留学生教育を
やって、ドイツ、スイス、中国、ロシ
アの若手研究者の日本研究のアシスト
をして、4人とも立派な研究者として
それぞれ母国や日本の大学の現役とし

て活動しています。

おしまいに、結びにかえてというこ
とで、研究者としての私は自分を自己
紹介するとき、最近では3つの分野の研
究業績①日本経済史研究、②日本近現
代史研究、③北陸・石川県・金沢市地
域史研究、環日本海地域交流史研究の
3研究テーマに整理して紹介すること
にしています（別掲主要業績目録参照）。

途中でもいったように、結果として
大学院時代とその利子でやっていた①
の時代から、金沢へ来て以降②、③へ
シフトしたというのが研究の一応の流
れです。これは大きく言えば日本近代
史研究の中でも、最近では地域研究を重
視するという流れがあると思うので、
そういう大きい流れの中にあってそん
なに踏み外さずに研究してきているよ
うに思います。

しかしそれぞれが3つとも今の段階
で見ると未成熟、未完成で、研究者と
しては今いるのではないかなど。その
ように自己評価できたのは、さっきも
ちょっといいましたけれども西田さん
を経済学部を迎える際に彼の業績を教
授会に報告する機会を与えられました。
もちろん同世代ですので、どういう研
究をしているのかはおおよそ知ってい
ましたけれども、あらためて彼の研究
を見ながら、西田さんは研究者として
一流で2枚も3枚も私より上手だなと
感じました。私が未完成だということ
を彼の研究を鏡としてみながら分かっ
た、というような次第です。

ただ、しいて言えば、大学人として私は私なりの役目は果たしたと思っています。大学で山辺さんとだいぶ議論し、それによって磨かれた部分もありますし、その点での自分の考えを踏まえた大学人としての活動というのは、ある程度金沢大学ではできたのではないかなと自己評価しています。

野村 どうもありがとうございました。では、西田先生お願いします。



西田 最初にやはり金沢大学に2001年の4月に赴任するにあたって、林有一君が1999年の8月に亡くなって、林君の後任という形になったことが重要だと思います。林君の何分の一の責任もはたせないだろうけれども精一杯やらなければならないと思いました。

一つは学部と大学院の教育の問題で、林君のやっていたことを引き継いでやるということですね。もう一つは学問とちょっと離れますけれども、林君がやってきた平和運動、山辺さんなども一緒にやっておられた平和問題ネットワークにも関係しますが、私自身も社会的活動でも責任を果たすという使命があるなど、強く感じて2001年の4月にここに赴任することになりました。

結果としてはどういうことになったかということですが、一つは、私は前に東大の社会科学研究所に27年間いたものですから、学部教育とはずっと遠ざかっていたのです。その学部教育をやることになって、現代日本経済史を講義し、ゼミを持つと、非常に私には勉強になったし、大学の先生は研究ばかりやっていて教育をおろそかにしているなんてとんでもない、教育に最大限の時間を使っていて、その合間に研究しているというのが実情だということがわかり、文科省の役人は何を考えているのだというふうに強く思いました。

次にこの5年間で何ができたのかということですが、一つは学部教育を私なりに多少満足できる形で携わることができたし、大学院では林君が残した院生を引き続いて研究指導するという形で、一応自立した研究者として博士号をとるところまで成長してきたので、まあ責任の一端を果たしたのではないかと思います。また社会運動といえますか平和運動の問題では、これはまあ橋本さんにそそのかされた面もあるのですが、九条の会石川ネットに関係し、九条の会金大ネットは山辺さんと相談しながら作ったのですが、とにかく210名を超える組織になって、毎月1回程度は集会や学習会をやってきて、今度も金大祭でパネル展示をやるということになっています。ですから組合を除けば

自立的な社会運動がかなりの規模で行われるという、そのお手伝いをする事ができたのではないかと考えております。

それから私自身の研究についてですが、さっき橋本さんが言われたのですが、我々が研究を始めたのは1960年代の後半ですね。大学院生ですけれども、その頃はまだ戦後歴史学、新しい歴史学の革新的雰囲気がありました。近代史研究の重点が明治維新前後の研究から日露戦後、第一次世界大戦期というふうに変わっていく、そういう時期にあったと思います。それで橋本さんの研究は私よりちょっと時代が下がりますけれども、私は1920年代を中心に研究を始めました。もう一つは方法論としては民衆史という視点が重視されてきました。ですから、橋本さんは労働運動史をやり、私は農民運動史をやるという一種の暗黙のうちの分業関係というのは、私はあったのではないかと考えています。

東大の最初のゼミを持った時には、農業史研究プロパーの院生が10人ぐらい、もちろん東大の院生もいましたけれども、ほかに一橋大学、早稲田大学と東京教育大学といろいろな大学の院生が来ていましたね。そういう意味では農業史・農民運動史研究ということが、新しいという雰囲気を持っていた研究分野だったのです。それがだんだん、高度経済成長が終わってME革命とか農業の日本経済に占める位置とい

うのも、比重が大幅に低下するという中で、農業史研究の位置も低下するという現象がみられます。兼業研究者になって、専業農業史研究者はごく少数になる、そういう状況に実際になっていると思うのです。

労働運動史の方もたぶん同じことがいえるのではないかと思うのですね。かつての総評を中心とする運動がまだしっかり残った1960年代までは、労働運動史研究をやるということはおそらく当たり前のことであった。だけどそれ以降は運動がずっと衰えてくると、労務管理史なんかをやる人は出てくるけれども、労働運動史をやるという人はもうほとんどいなくなったというふうに言ってもいいのではないかと思うのです。そういう時代の大きな変わり目で、橋本さんも私も、研究をしてきたと言えるのではないかと思います。

それでは、どういう研究が主流になってきたかということ、経済史の分野に限って言うと、個別企業史が中心になった。つまり経営史が中心になった。経済史から経営史へというシフトが私は起こったように思います。

ですから一頃までは鉄をやっていますとか、石油をやっていますとか、船をやっていますというぐらいだったのですが、今は何々会社の研究をやっていますというふうになってきて、一体社会的な批判というか、世の中全体を捉えてその中で自分の研究をどう位置づけるかというような、そういう視角

が非常に弱くなってきているのではないかと、今後の経済史研究の発展ということ考えた場合に非常に問題だという気がしています。

また今の段階というのは永原慶二先生が『20世紀日本の歴史学』という本を書きましたけれども、20世紀を総括することが求められていると思います。私も2003年にオックスフォード大学のAnn Waswoさんとの共編著で“Farmers and Village Life in Twentieth-Century Japan”という本を出しました。これは日本語でも東大出版会から『20世紀日本の農民と農村』という本として出ます。その中でもとりわけ『西山光一日記』という農民の日記、これは1925年から1975年までカバーしていますが、その日記を主として使って、私は最初の概観というところで、大雑把に言って農家が農業経営の発展を目指してずっと頑張ってきた1950年代までは、農民的・小商品生産の発展という農業中心に経営を進展させよう、そういう動きが主流だった。

また戦時中も戦争協力という形で、生産増強ということを目指した。戦後農地改革があって、農地改革の次には農業改革へという形で土地改良事業とか、土地改良投資が盛んに行われるようになった1950年代以降は、毎年豊作だという時代があった。

ところが1960年以降になると米の過剰の問題とか兼業化の問題が起ってくる、それから農地の切り売りの問題

が起こってくるということで、農業生産の場面が一気に縮小していく過程が進行します。しかし実は農家経済はいいのです。鈴見や若松の辺りの農家の家を見ても皆立派ですよ。しかし、農家は立派になったけれども、農業は衰退したのです。

そこが非常に大きな問題点で、もう農業生産の国民総生産に占める割合などというのは、もう2%かそこらになっていて、農業就業人口でいっても5、6%という水準にまでなっているわけです。そういう意味では20世紀の日本農業を歴史的に辿ってみると、1950年代までの家族農業経営を基本にして発展させようとして営々と努力する、その頃の活気のある農村と、それ以降金持ちにはなかったけれども全く活気なくなった農村、この対比が1960年代の後半、ちょうど私が研究を始める頃起こり始めたのです。

そして私の研究を始める動機が、何で日本の農村はこんなに保守的なのだろうというものでした。

西山光一日記を見ても、集落中で自民党の代議士たちとも結びついて土地開発をやるのが60年代なのです。西山光一さんは、1960年代になるまでは自民党の応援なんて全然していなかったのです。ところが1960年代になると選挙事務所までいって一緒にやってやるということが記録されていて、開発と保守化ということが一体になっているということが分かったのです。今

度出す『20世紀日本の農民と農村』というのは、20世紀のこれはもしかして農業だけではなくて、日本社会全体を見る上でも高度経済成長期の変化の意義を示す本になるのではないかというふうに思っています。この本を金沢大学に在職中に完成させることができるということで、私としては責任を果たしたという、そういう気持ちになっているところです。

野村 どうもありがとうございました。それでは最初にお二人の学問についてご質問、ご意見、ご感想を、お願いします。

内山 では橋本さんについてですけども、大学人としてはある程度満足されて、研究をこれからまたお続けになるのでしょうか、金沢大学経済学部で橋本さんがいかなる役割を果たしたのかふりかえてみると、創設当初から重職にあり、林君と私が育つことができたのはやはり橋本さんという大きな傘の下でのことなんです。だからご自分の大学人としての評価をされていますけれども、むしろ若手を非常に育成されたのではないかと思います。その点は逆に若手に注文はあるのでしょうか。そこら辺はどうですか。果たして本当に橋本さんの期待に私たちは答えていたのかどうか。

橋本 いや、私はまだそれを語る心境ではないな。でもまた林君の話になるけれども、その時の人事選考は、今の人事の進め方を考えると全くイレギュ

ラーでね、あの頃は「設置審提出の人事」というようないい方をしてね、公募だとかの方法を採らず、人をはめ込んでいったわけで、したがってその専門にかかわる人間がどういう人を責任をもってリストに載せるのかというのは、非常に重要な意味を持っていた。

そういう点で自分が選択した林君なり内山君という人事について、間違いはなかったと確信していますね、その後どうなったのかということに対して、私はそんなに影響力を与えているというふうには思わない。二人を呼んできたということの結果はあとあと大きい意味をもった。その雰囲気を経済史のこの講座での人の集め方におおよそ何らかの影響、いい影響を与えたのではないかなと思っていて、皆ハッピーでよいしょするわけではないけれども、経済史の講座としてはうまく運営できてきたと思う。

農業と工業などという古臭いわけ方をしたけれども、それで私は全く力が及ばなかった農業の分野について、もう林君だよと見た見方は、今の段階でも間違ってたなかったというふうに思います。

山辺 今のとちょっと関連するんですが、私が一つ聞いたかったことは、内山君とか林君とかを橋本さんが採ろうとしたときの最初の思惑と、実際にこの人たちが来られてその人たちがはまっていった出来上がってきた新しい学部というのは、最初の思惑とギャップが

あったのではないかなという気がするんですが…。

橋本 それはあったと思うね。

山辺 それがかえってうまくいったんだと思うんです。最初にあった経済学部創設の頃のイメージというのは、あのままで進んでいったら、そうとうきつい状況になっただろうという、私なんかは不安を持っていた。ところが新しい人が来たら、皆さんすごく个性的で、お二人もそうだったし他の人たちも皆そうで、何か最初我々が、古いメンバーが思っていた思惑をまるきりパーンと飛ばすような、そんな人たちが来られて、新学部のイメージがそれまでのイメージと大きく変わってしまいましたよね。その辺りがおそらく経済学部にとっては非常によかったという気がしますね。

特に経済史の大講座にとっては、それは本当にラッキーというのか、本当によかったと思います。衝撃的なぐらいよかったです。ほとんど話もできなかったような関係だったのに、どんどん話ができるようになっていった。林君や内山君が来られて、あるいは水谷君とか堀林君とかも、そういう新しい人達が来て、雰囲気がるまるきり変わってしまった。やはり学問的にも全体的に面白くなったですね。若手研究者の会みたいなのができて、一緒に喧嘩したりしましたね。林君とか内山君とか。あの時期はよかったなという気持ちは今でも強いです。

橋本 私はほとんど同じ意見です。1990年前後の頃だと思うけれども、私は「創業者精神」という言い方をして、現状ではそういうような精神にこだわるのはもう駄目だと思います。ところが今でも「そもそも経済学部発足の際には」等という声が時々聞こえますが、新しい時代に入ったと観念する必要がありますでしょうね。

内山 ただそれは私は離れてみて思えるのですけれども、私たちが来て勝手なことを言って、私だって前田さんの急死によって金沢大学経済学部に来られたという妙なめぐり合わせですけれども、それが宇都宮という他のところへ行ってみると、もともといた方たちの懐は深いのですよ。どういうことかということ、私が向こうへ行ってもう12年経って、その半分をほとんど管理職をやり、元教養学部から国際学部という新しい学部を作るにしても、昔の人間関係の延長としか受け止められないと、やはり新しくいくら若手も入ってきてても育たないのですよ。結局うちの大学はその点ではうまく行っていないなと思います。そういう点からすると金沢大学の北陸での位置とか、それから大学全体が大きいですからね、刺激も大きいと思います。その中で小さな経済学部はどう対応するかというのは、いろいろ比べてみると、一番大きいのは玉がそろっているなという感じですよ。私のいる国際学部だって今センターを作って人を出してしまったから、今

の教員が36人で、昔の金沢大学経済学部みたいなものでしょ。議論をやりうと思えばできるのだけれども、なかなか世代交代がうまくいかないし、ここに腰を据えてやりうという覚悟が非常に弱い。都市近郊というか、東京に近い大学ということで東京から来るのだけれども、本当に腰を据えてそこに根付かないとかね。そういう状況もあるから、私の12年間、私は82年にきて、94年に移りますけれども、この12年間というのは私にとって非常に修行になりました。なんだかんだと言っても橋本さんの目というのは気になりますから論文を書いてないと、東京で待っている間に書いたらうねというように常にプレッシャーをくれたし、それと同時に私が感謝するのは、山辺さんが89年に私の授業に出たでしょ、半年か、天安門事件以降。これは私はいまだにすごく感謝しています。私はあれから私の講義は少し変わって行って、宇都宮に行ってビデオをどんどん使うようになりました。だから専門の話だけするのではなくて、いかに専門外の人に専門の話をするかという点ではすごい刺激をいただいたなということを感じました。

野村 話はおのずと後半の大学行政論のほうに移っていつているのですが、このところ経済学部は一気に人が入れ替わり、これまでの経済学部の歩みを知っている人も少なくなりました。今後の経済学部について、あるいは金沢

大学の現状について、何かお言葉があればお願いしたいと思います。

橋本 私は法人化後理事になってからは大学全体の関わりで見っていますが、経済学部のことはつねに気になっているというのが正直なところです。けどおおびらに経済学部利益誘導をするようなことはもちろんできない。ただ我々が培ってきた経済学部としての学部の実績みたいなものが、今後一体どうなるのかということちょっとまだよくわかりません。

一点だけ林学長の学域構想に賛成してこの仕事をやりうと思ったのは、学部の壁はあまり大きく厚くして続けると、この先いろいろな流れの中で太刀打ちできなくなるのではないかなと考えました。したがって一つの試みとして、3学域構想に同意したわけです。

今度は私は逆の立場に立ったわけですが、新しい方向性でも行かざるを得ないというときに、やっぱり将来設計をするのは若い世代が、ある程度責任感を持つ必要がある。非常に抽象的で申し訳ないですけども。そしてその人材は私は金沢大学と経済学部にはいると思っています。

中島 私も40中ごろになってきて、山辺先生の退官のときもこのような話をしたのですが、教授会の自律や大学の自主性が今非常にクリティカルな局面にきています。私は今の学部再編計画のなかで、学部の壁を低くして教育を活性化するというのは、金沢大学の総

合性を出す意味でいいだろうと思いませんけれども、その理念に照らしあわせて今後の「系」や「学類」の教授会のあり方がどうなっていくのか全然自分には見えていません。私も中堅クラスになりましたけれども、最近の教授会では問題を投げ掛けても私からあとの世代の若い人たちの発言があまりない。顔が見えないので、今は私は教授会でどうやって動いたらいいか、ちょっと困っています。

上の人たちの方が自らの意見をはっきりと出してきますし、私もそれぞれのお考えを知っているつもりなのですが、その意味で40代前半から下というのはかなり人数が増えていますけれども、「顔が見えない」という意味で怖いところがあります。自分自身に学部内の議論を盛り上げる力がないのだとは思っていますし、また教授会以外の場所でもいろいろ話をしていかなければいけないのかなと思っていますけれども、何かこれまでと雰囲気が大きく変質しているような気がするのですね。

橋本 ただ若手が何もやっていないわけではないのですよね。研究以外のことをそれぞれ皆何か関心をもっているようだけれども、顔が見えないといわれたけれどもそれは本当にそう思います。

中島 非常に個性があるし、仕事も丁寧だし、授業なども評判がいい人が多いです。このことは強調しておきたい。

だけれども大局的というか長期的にどうか、どういう観点で学部を運営していくのかというところで、声を出してもらわないと、不安定極まりない、そういう感じがするのです。個々には本当に素晴らしい人がいっぱいいますね。

橋本 やっぱりそれは引っ張っていくよりしょうがないよ。

西田 今週も文、法、経、3学部、文系教員の研究が、野村さんが報告者ですけれども、そういうのをやって、それぞれもう少し学部の垣根を低めるといことも含めて、やろうという動きがあるわけでしょう。だから全然希望がないということではないのではないかな。私は山辺さんに半分習って、家庭の事情もあるのですけれども、教授会での発言は、一年切ったのだからあまりしないと。それで若手が中心になってやっていくべきだというふうに思っているのです。

山辺 私はエスケープしてないです。

西田 だから全然、何というか不安だということはわかるけれども、何とかしようという新しい動きを作り出していこうという動きもしっかり見えるのではないのでしょうか。

野村 中島さんが言われることはよくわかるのですが、この数年、改革、改革と続いて、全員がちよっと疲れ果てて、言葉が出なくなっている感じがありますね。

山辺 ただ時間が迫っているというの

はどこでも皆同じだと思う。一番困るのは、いろいろな線がありすぎて、どちらへ行くのか先が読めない。大学に主体性がなくなったのかも知れませんね。中島さんがいうように、若い人たちというのはそういう意味では、大変なのかもしれませんね。年寄りたち我々の世代というのは、意見の違いがあったとしても、大きな一本の時間を共有しているようなところがあった。喧嘩をしながらもその中でやってこられたということがあったから、お互いある程度先の方が見えてきたんですね。ただ早くなるか遅くなるかはあったとしても、だいたいそれを見て議論ができた。だけど今やっていることというのは、いろいろなものがあって、それらが一体どこに向かっているのか全然わからないようなものがポッポ、ポッポ出ては消え、出ては消えてでしょう。我々はとてもついていけないのですよこういうのは。これはもう私なんかの出番はないと思ってしまう。だから段々話が出来なくなりました。

教授会で中島さんなどが将来構想の話をしても真面目に聞いてもらえないのですね。この話を聞いていても、どうせまた違う話が出てくるのではないか、そんなふうになったら、本当に真剣になって聞いてそれに対してどうやろうかなどというようなことを考えられなくなってくる。そうするとほったらかしていくことになってしまう。私などは、これは自分の自己弁護も多

いのですけれども、そんな気がするのですね。

内山 ちょっと関係するから言うのですけれども、私は東洋文庫の研究員で編集委員をやっていますが、学会の全体の動向が何か上滑りになってきたなという感じがしていて、だから個別論文としてはいいけれども、その次にこの人の研究はどうなるのというのが全然見えてこないようなのがすごく多くなっている。それは一つは科研費が、プロジェクト型というのになっていて、うまく組織した時はいいけど、組織者がいないという感じなのです。そうすると一発当てればいいけど、その後どうなのという結局すぐに金がとれそう、すぐに本になりそうというような感じが学会全体に今出てきて、それで疲れ果てているわけです。東洋文庫にも、法人化の動きが及んで、前は兼任研究員とか僕ら兼任研究員みたいなのが、適当にいたのだけれども、そうではなくて専任研究員がいるべきだということで、80才過ぎの方たちが専任研究員になって、それで私たちみたいなのが兼任研究員でいるという形だけとられていると、結局金をどうとるか、だからいろいろなプロジェクトを立てて、結局金を取るために今度は有名人を研究員に連れてきたというと、じっくりそこでやっている人たちの研究はなかなか日を浴びなくなっている。だからこれは私は日本の研究全体からすると非常に危機だと思うから、や

はり論文では質の高いものを出してくださというような要求はしているのだけれども、でもそうはいいながらも彼らのはっきりいって『東洋学報』に載れば業績になりますからね。投稿してくるという気持ちはよくわかるわけね。そうなるどころで妥協したらいいかという感じもするので、1大学だけではなくて、学会全体が非常に曲がり角にきている。活性化はいいのだけれども、活性化は一步間違えれば自滅するのではないかという、非常に危機的な状況だと思います。

西田 やっぱり国立大学の法人化というのは非常に大きいと思いますね。その中で中期計画、6年ごとに評価をする。結局その間にどれだけ業績を出すかという話になってきますから、落ち着いて、例えば私は『西山光一日記』というのを結局20年かけて作ったのですね。こういう計画というのはもう作れないわけですよ。6年間の間で納まる仕事をしようということになってくるから。

でもやはり国立大学の法人化というのは、実は大学の組織を変更するというだけではなくて、学問の質というか、そういうものをも変えていくもので、どうやって乗り切っていくかは非常に難しいと思いますけれども、大問題だったと思いますね。

だから法人化される前まで必死になって抵抗して、法人化に反対する運動を半分身をはってやったつもりですけれ

ども、法人化が決まって以降は運動疲れもあって何もしなくなりました。法人化は本当に大学の危機につながっているとと思います。

内山 私はたぶんこの法人化での問題は、すったもんだして10年ぐらいで落ち着くにして、その落ち着き先は何かというかと質がやはり問われてくると思います。それは例えば博士号をどんどん出せといっても安売りをしていって、国際基準という話が出てきて、これはやはりアメリカとオーストラリアが乱発しているというように、相当の批判があるでしょ。そうすると日本がどうなのかというときに、また見直しが出てくると思う。やはりライセンスではないのだからもう一回考え直さなければならないと思います。宇都宮大学でドクターを持っているのは工学部で、農学部は農工大の連合の一部なのです。だからいくら博士号を出したって全部農工大に吸い取られるのではないかと思うんです。工学部の連中と一番食い違うのは、博士号の取り扱い、彼らはやっぱりはっきりとライセンスだというんですよ。けれどもやればいいという問題ではなく、見直しの時期が来ると思います。大学だってさっき西田さんと話していたけれども、北関東なんてやがてガラガラポンで群玉大学と私たちは呼んだのだけれども、あれはだめになったけれども、決して消えたわけではなくて、埼玉大学が今中心で工学部などがまた連携の

動きをしているのですよ。そうするといずれそういう大きな動きが出てくるときに、残れるものは何かといったらやはり仕事をしているものだろうと思います。それで若い人には博士号をとってきて下さいという注文を出しているし、ほとんど最近博士号をとってちゃんともってくるような人達が増えてきましたから、雰囲気が変わってきているのですけれども、しかし中島さんがおっしゃったように、では学部として何を作るのという、これがうちもそうなのですけれども盛り上がってこないのですね。だから非常に障害はあるのだけれども、やはりこれは研究しているしかないでしょう。それで研究の中身で勝負の時期が来ると考えたいし、最後はそうするしかないのではないかなという気がするのですね。

井納 西田先生が金沢大学に来られて5年が経ちましたが、西田先生の研究が私の研究にもかなり影響があったと今になって思います。というのは、私は今まで近現代中国農村経済史を研究してきましたが、いわゆる穀物生産というのはあまり関心がなかったんです。でも西田先生の研究を拝見させていただいて、米ですかね、食糧というものの重要性、それが社会の中でも持っている意味というのを考えるようになって、最近中国の食糧事情みたいなことを研究しようと考えています。その食糧問題から社会経済の像というのが作ればいいかなという感じで、影響を受け

ました。それから橋本先生には実は教えていただいたことがありまして、私が金沢大学経済学部に着任して11年たちましたが、1995年に着任した時に、橋本先生の研究室に呼び出されて第二次面接のようなものを受けて、そのときのことは実は何を言われたか半分ぐらいもう忘れていたのですが、一つだけ覚えているのは、経済史講座は窓際なんだからどうなるかわからないんだと。ではそれで弾き飛ばされないようにするにはどうしたらいいだろうかと。経済学部というのは博士号学位を持っている人がほとんどで、私はもっていなかったの、そんなのでは弾き飛ばされるぞという、とにかく早く学位を取れというようなことを言われた記憶があるのですね。それで私は確かにそれはそうだなと思って、35才で来ましたから、それで必死になってやったつもりなのですが、今何かアドバイスがあれば、ぜひ退職される前におうかがいしたいのですが。

橋本 最初に言ったように、経済史講座での人の選び方は総合的に全く間違っていなかったなと思っていて、それぞれの個性を発揮して今後やっていって欲しい。ただし、井納君にあえて言う、やはり中島君が苦勞しているわけですから、経済学部というものをこの先どうするのかを考えながら協力関係を大事にしていって下さい。

山辺 いやこれはあれですよ、単純にやっぱり理論とか歴史という分野は知

的破廉恥みたいなのはどうしても必要なのではないかなと思います。だからそれぞれに思い当たるところがあって、橋本さんに言われてほしい皆んなハッと気がつく。そういう感じがします。

野村 それでは締めくくりに、西田先生と橋本先生からお一言ずつ、お願いします。橋本先生はこれからどうなさるのですか、理事や副学長にお残りになることは？

橋本 理事は退職年齢に合わせて2年間やるという約束で引き受けました。2年1期でやってきたわけだから、来年の3月で任期2年満了で、私は辞めると意思表示しています。まあ非常勤講師をボランティアでやれと言われればまだやりますよ。

野村 そうなのですか。西田先生は東京にお帰りになりますよね。

西田 東京というか静岡県伊豆の宇佐美というところに書庫を建てたのですよ。

野村 それでは、お二人のこれからの人生に対する抱負と私たちに対する注文をお願いします。

西田 では私のほうから、最後に橋本さんに締めてもらったほうがいいと思うので。私の退職した後の予定というか、希望というか。2冊の本を書きたいと思ってます。一つは途中手がけていたのですけれどもやめている障害児教育史と障害者福祉問題です。今までに3本論文を書いているので、もう1本イギリスと日本の障害者実態調査報

告の比較が可能なので、それを分析したものを加えて、えっこれが西田の本という、あっと驚く分野、日本経済史とはぜんぜん違うんじゃないという本を書きたいというのが一つです。それからもう一つはこれは私の専門と関わるわけですけれども、農地改革論についてこれも2本ほど書いているのですけれども、これを延長していけばちょっと一味違う農地改革論が出せるかなということで、その2冊を宇佐美の山小屋にこもって書きたいという希望を持っています。

その後はどうなるかわかりませんが、できればのんびりしたいのですが、きっと社会運動だけはやるだろうなという気はします。

それからこの経済学部なり金沢大学に対する要望は、私は5年しかいませんでしたので、とりたててこういうふうにするべきとかああすべきだという意見を持ち合わせません。けれども、日本の大学全体が非常に落ち着いた雰囲気、研究教育できるという状態ではなくて、次々と改革で、改革疲れという言葉がさっき出てきたけれども、そういう状態を変えて、落ち着いて教育研究にまい進できる体制ができればいいなと思います。若い人達をみると本当に気の毒だと思うので、これは何とかしないと日本の学問の水準にかかわってくるという危惧をもっています。

橋本 私も西田さんに習っていると、

研究の面で2つの本をまとめたなと思っていて、その一つは、この間ずっとやってきた若手との地域史研究会での共同研究成果をまとめてまず一つ本にしたい。おおよそ骨格は出来上がって、順調にいけば来年の3月に刊行という予定です。この刊行の際にはその本をめぐるセレモニーをやるという企画があります。

それからもう一つ個人的には、この間考えてきた日本と極東ロシアとの関係、もちろん戦前の交流史研究の分野ですが、ウラジオストクとサンクトペテルブルグと日本国内とで集めた関係資料を持っています。これはそうとう膨大な資料が集めてあるので研究を展開して、それを本にまとめたいです。

野村 何に関する資料ですか。

橋本 ウラジオストクの在留日本人が出した現地発行の新聞の分析をしたいなと思っています。これは在留日本人が現地で発した新聞としての量は、もちろんブラジルだとかハワイだとかには比べられないけれども、ロシア革命後からシベリア出兵を経て1930年代ぐらいまでのものがあるので、そういう意味では非常に貴重な資料です。その整理と分析をして、それができれば研究者復帰できるかなと考えています。

一番最初の履歴のところではふれませんでしたけれども、皆さん方にはある自分の出身大学というものが、私にはないのですね。筑波大学はもちろん存在し、学籍簿も筑波にあると思うけ

れども。母校東京教育大学はなくなってしまった。そういう意味でこの大学というのは、金沢大学というものに三十数年間在籍してきたわけで、やっぱり金沢大学の行く末というのは、母校ではないが母校に近いような気持で気になります。法人化にあたって私は西田さんほど強い意志を示さなかったが、法人化反対を公言しました。にもかかわらず、現在金沢大学法人の経営にかかわっていますが、それがどのようになっていくかということに対する責任というのは、やはり感じています。

西田 私は前に橋本さんにいろいろ話を聞かせてもらって非常に面白かったことがあります。それは、ロシアといってもヨーロッパロシアと極東ロシアは違うのだと、ここの違いをはっきりさせた上で日本とロシアのかかわりというのを考えると、ずいぶんいろいろな問題が見えてくる。ヨーロッパロシアと極東ロシアというふうに分けた上で、日本はどういうふうにかかわってきたのかということ、これはそういう見方をすると新しいものが見えてくる可能性が非常に高いと思うので、私としては非常に期待しているところです。

野村 どうもありがとございました。では、記念写真をとりたいと思います。